テーマ:「持続可能な社会を目指して 理念から行動へ 今変わる時」
～暮らし・生き方を語り直し、見つめ直す～

コーディネーター
川井 秀一
（かわい しゅういち）
京都大学 副理事・教授、
認定NPO法人才の木 理事長

日本木材学会会長、日本材料学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人才の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。

コメンテーター
マリ クリスティーヌ
（Mari Christine）
異文化コミュニケーター
あいち海上の森センター
名誉センター長
国連ハビタット親善大使

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

パネリスト
阿部 健一
（あべ けんいち）
総合地球環境学研究所
研究推進戦略センター教授

基調講演講師

パネリスト
稲村 哲也
（いなむら てつや）
愛知県立大学 教授、
同多文化共生研究所 所長

文化人類学が専門で、ペルー、ネパール、ブータン、モンゴル、中国などで牧畜社会を中心に100回に及ぶ現地調査を重ねている。2010年COP10 開催にあわせ「せかいSATO（里）フェスタ」「先住民族サミット in あいち」の組織運営を主導し、先住民族など先人の文化から生物多様性保全、自然の持続的利用に関する知恵や価値観を学ぶことの重要性を提言。中国四川大地震の復興支援にも携わる。愛・地球博記念公園・公園マネジメント会議会長、中部人類学談話会会長。

パネリスト
高野 雅夫
（たかの まさお）
名古屋大学大学院
環境学研究科 准教授

地球環境システム学が専門で、さまざまな分野の専門家と協働し、地下資源が枯渇した千年後でもやっていられるような地球と社会のシステムをつくりだすための「千年持続学」を構想中。県内山間地域等をフィールドに、地域住民とともに将来の地域の姿をデザイン、小水力・マイクロ水力発電等の自然エネルギー等の新しい技術の開発も行なう。

パネリスト
空木 マイカ
（うつぎ まいか）
ラジオパーソナリティ、
JICA 中部なごや地球ひろば
オフィシャルサポーター

ラジオパーソナリティ。ZIP-FMでレギュラー番組SMILE DELIを担当中。JICA中部なごや地球ひろばのオフィシャルサポーターとして、エチオピア、ルワンダを視察した経験から自身のラジオ番組やイベントにおいてアフリカの現状や国際協力についても伝え続けている。他にコップなごや水基金のコーデュネーターや、フェアトレードタウンなごや推進委員など活動は多岐にわたる。東日本大震災後は名古屋から現地ボランティアを支援する団体Supporter's Supportを立ち上げ、代表として現在も日々奮闘中。

【川井】　まず稲村先生、高野先生、空木さんから話題提供をよろしくお願いします。

【稲村】　私は南米アンデス地方の先住民族の研究を30年以上やってきました。アンデスは熱帯に位置する高地であるため、高さに従って気候が違います。ですから非常に多様な自然を持った地域で、そういうものをうまく利用してきたのがアンデスの人たちです。今われわれが食べているジャガイモやサツマイモ、唐辛子等は、実はアンデスの人たちがつくり出したものです。

アンデスには「数千種類の品種」と言われるほどものすごい種類のジャガイモがあります。これはアンデスの民が栽培化する過程で、遺伝的な多様性を生み出したからです。こういった多様性があると、1つの品種が病気になっても他の品種は助かるとか、苦くて加工しないと食べられないけれども虫に食われないとか、非常に持続的なものを持っているわけです。

アルパカはビクーニャという野生動物を家畜化したものだと言われているのですが、ビクーニャは毛が豊かで質が良く、昔はインカの王様が使っていました。スペイン人が入ってきて、銃を持ち込んだので、絶滅に向かっていたのですが、最近、昔の習慣を復活しました。そうしたら数が増えてきました。これは、みんなで捕まえて毛を刈って、その後、生きたまま放すんです。この毛を売って先住民の人たちの生活が豊かになる。同時に家畜が増えている。そしてお祭りもやって自分たちの歴史を見直している。

アンデスにおける生物の多様性の特徴を見ますと、野生のものを維持したりして、非常に多様なものをむしろ作っているわけです。そして、グローバル化といわれる現代の中でもローカルな伝統的な知恵というものが非常に役立っており、それが生物多様性にも貢献している。つまり、こういった文化というものが生物多様性と同時に非常に大事だということ、これが今日の私の主張です。

われわれ日本の中でも、そういったことを見直す、そして広く世界の人たちとコミュニケーション、情報を共有しあって、これからの生き方を考えるということが重要ではないかと思います。ローカルにもグローバルにも、つまり「グローカル」に考え、そして行動できたらいいのではないかということです。

【高野】　福島の原発事故は、日本の環境史上、最大最悪の環境汚染であると私は思います。原子力発電とはこんなに危険なものだったのか初めて分かった方が多かったと思うのです。なぜこのような危険なもので電気を作っているのか、そんなこと頼んだ覚えはないという方も多かったと思うのです。

ただ、今の暮らしは、何でも買ってきて、自分が作ったりはしないので誰がどうやって作っているのか知らなくてもいいし、関心も持たない。電気が好きなだけ使えるというのは当たり前で、難しいことは専門家に任せればいいということの、ある意味では行き着いた先なのではないかなと思うのです。

僕はずっと自然エネルギーのことをやっていたので、原発以降、「専門家としてどう思われますか」と聞かれるのですが、そういう問題ではないんです。むしろ、「専門家に任せていたらこうなる」という話なので、皆さんで自然エネルギーについて考え、みんなで一緒にやっていく、そういうものではないかと思うのです。

事故が起きたのが、まさに日本が右肩上がりから右肩下がりの社会になっていく変わり目で起きたことは、すごく象徴的なものと思っています。右肩上がりの社会を支えると漠然と思い、専門家に任せてきた原子力発電が事故を起こした。ではこの右肩下がりの時代をどう生きていくのか、どういう社会の仕組みにしたいのか、そこでの私たちの価値観はどういうものを持ったらいいのか、非常に分かりやすい形で問題提起がされたということかと思います。

私は、石油も原子力も駄目なので、自然エネルギーについていろいろ研究をしてきました。岐阜県の小さな農業用水路に水車を造り、電気を作る実験をしました。できた電気は30ワット。水はずっと流れているので、昼間の電気をバッテリーに貯めることで、古民家の照明は全部できたし、小さなキャンピング用の冷蔵庫、おもちゃのような洗濯機、

それから、テレビはなくてもいいけれどインターネットは欲しいということでノートパソコンとモデムという暮らしがこの30ワットでできることを、学生が修士論文でやってくれました。今の私たち一世帯あたり400ワット生活の10分の1以下で、非常に文明的な暮らしができるということを学びました。

豊田市の新盛町に、豊田市里山くらし体験館「すげの里」があります。この施設は自然エネルギー100%で運営できています。電気は太陽光、お湯は周りのスギ、ヒノキの間伐材を使った薪ボイラー。暖房はその薪ボイラーによる床暖房と薪ストーブ。実際にやればできてしまうことが分かるということで、このフォーラムのフィールドワークでも行って見ていただいたところです。

午前の分科会では、3.11をどう受け止めたか、素直な気持ちを語り合ってくださいとお願いをしました。そうしたら、いろいろな、深いいい話が出てきました。

「江戸時代に戻るのは無理だけれども、便利で楽だけれど必要のないものがたくさんあるのではないか。もっとシンプルに暮らしたらいいのではないか」という意見がありました。利便性が増えて、その分、横のつながりが薄くなった。ハードはどんどん進んでいったけれど、ソフトが薄くなりつつあるのではないか。「あったらいいな」というキャッチコピーは裏返せば「なくてもいいよね」ということではないかということですね。

それから、上の世代が下の世代に何が残せるのかということがすごく大事だけど、今の若い世代の人たちは、このばら撒かれた放射能と共に子育てをしていかなければいけない、そのときに何ができるのかということを、ぜひ考えていきたい。

客観的な事実を知るということが大事で、それがなかなかできないということも非常によく分かった。マスコミと学者と政府の言うことは信用できないという常識が市民の間にできてしまったわけですね。インターネットも、多様な情報が流れている中で、それが正しいかどうかは、また別の視点でチェックし合う、そういうことが必要なのではないか。福島の人だけががっかりするのではなく、みんなで分け合おうという話も出てきました。

岩崎さんからは、人と自然と歴史が長い時間をかけて、なるべくしてそうなった暮らしというものが大事だというお話がありました。

哲学者の内山節（たかし）さんが、「自然（じねん）な暮らし」ということをおっしゃっている。このフォーラムのタイトルも「人と自然の共生」で、「自然」の中に「人」が入っていないですよね。阿部先生のお話にありましたように、自然の中に人が入るべきなんです。そこが抜け出たと錯覚したというか、思ってしまっているのが、今の私たちの暮らし方、その価値観こそが問われているのではないか。

「人」と「自然」と「歴史」が、長い時間をかけて災害があったり、一旦禿山にしてしまったり、そういう失敗を積み重ねながら、なるべくしてそうなっている暮らし、そういうものを取り戻していくことが大事なのではないかと思います。

田舎に、最近若い人がやって来て、住み着いたりします。価値観を変えるとかそういう問題ではなくて、別の価値観を持って田舎に来て、これが普通でしょうと言って暮らしているのです。そういう若い人たちと一緒に、田舎を盛り立てるにはどうしたらいいかということを今いろいろやっています。ぜひこういう人たちと交流しながら、新しい価値観ってなんだろうということを考えていただければと思います。

【空木】　高野先生から「難しいことは専門家に」ではなく、一人一人が考えるときだという話がありました。まさにこのフォーラムがそうだなと思います。若い世代の一人として何か話せたらいいと思っています。

私は普段、ラジオの仕事をしています。震災の後、ラジオとテレビでは役割が違いました。テレビは、今何人の人がどういう状況にいるだとか、全体の状況をマクロの視点、目に見える状況を伝え続けました。一方ラジオは、目に見えないものを伝えていたんですね。そのときにどういう会話が今私たちの周りで行われているのか、どういうことを今思っているのか、心の移り変わりの変化を流し続けたのが、私はラジオだと思っています。どっちがいいか悪いかではなく、あのときは両方必要だったんですね。

そんな中で、みんなの心の変化にある傾向がありました。示し合わせていないのに、同じようなメッセージがたくさん来るわけです。

金曜日に地震が起こりました。週が明けて月曜日の朝にいただいたメッセージは、圧倒的に、みんな自分たちの身に起こったときを想定しての、備える内容のメッセージ、これがもう9割でした。

火曜日以降、これが変わってきたんです。火曜日から木曜日の間に届いたメッセージは、愛と祈りのメッセージだけだった。テレビではその間も、ずっと悲惨な状況が映し出されていました。でもラジオに送られるメッセージは、ネガティブなものが一切なく、「今こんな気持ちを届けたい、こんな未来にしたいよね」っていうものしか届いていなかったんです。

そしてちょうど1週間後の金曜日に、またメッセージががらりと変わりました。東日本に向けた思いというところから、今度、自分に向かって、自分が一体何をしていくべきなのかというのが、1週間後から出てきた視点でした。

私はフェアトレードの活動もやっているのですが、5月に名古屋でフェアトレードを広めるイベントがありました。そこに参加しようとしていた団体の方が、「こんなときなので」と辞退しました。うちの代表は、「こんなときだからこそ、これはやるべきなのにね」と言ったのですが、私はそのときは、自分の中で答えが出せずにいました。

震災後1週間、うちのラジオ局のナビゲーターとスタッフで募金活動をやっていたのですが、その帰り道、ホームレスの男性が名古屋市内で、ザルの中で雑草を洗っていたんです。私は、それを食べるように大切に洗っているように見えました。どうか寄付をと言って集めたお金は確かに東日本にいきます。でも、同じ市内で同じように苦しんでいる人がいる。思い返してみると、同じように苦しんでいる人が、国外にもたくさんいるんですよね。だったらどうしたらいいのか。

その時に思いました。「世界の仕組みを変えるしかないんだ」と。だからこそ今、フェアトレードのイベントをやることは、すごく意味のあることなのだな、と。こういうことが、きっとたくさんあるんだと思います。

福島のことが起こってから、私たちは電気のことについて考えました。何気なく使っていた電気が、こんな危険をはらんでいたなんて考えていなかった。知ろうとしていなかった。でも、そんなことが実はたくさんあるんですよね。自分が買ったものが、例えば途上国の人をすごく苦しめて作られたものだとしたら、それはやっぱり嫌ですよね。同じだと思うのです。

だからこそ、この震災が起こった後に、エネルギーの話と同じテーブルでフェアトレードのことも話さなくてはいけないし、一つ一つの自分の生活のことをもっと見直していかなくてはいけない、そんな作業が必要なのではないかなと、本当に今回思いました。

【川井】　基調講演で、阿部先生に「つながり」の大事さということについてお話しいただきました。里山などに関連して、人が自然に関わることによって、むしろ自然が豊かになるということが研究レベルでも明らかにされているのでしょうか。

【阿部】　人文社会学の研究では、こうした考えは、欧米の方にはなかなか理解されないことが分かってきました。自然と人とを峻別したところから西洋近代が始まったからでしょうね。ただ世界的に見れば、里山のように人も自然もつながることで豊かになる、そういった土地利用が各地にあります。例えばモンゴルの草原。ちょっとわれわれがイメージしている里山とは違うのですが、草原を維持しながら家畜を育てて、そして家畜から人が生活の糧を得ている。家畜が適度に草をはむことで、草原が維持されることが、これは自然科学の研究成果ですが、明らかになっています。草原に家畜のいる景観も、最も広い意味で里山です。今、里山でなく"Satoyama"と表記しようとしている、まさにその点なのです。日本の里山を世界中に広げようというのではなくて、日本の里山の考え方、自然と人がつながって豊かになることを、世界で共有しようということが"Satoyama"ということだろうと思っています。しかしSatoyama的な自然との関係が、世界のあちこちで崩壊し

ていることも併せて指摘しておかなければなりません。

【川井】　大槌町について、話を聞くだけのボランティアがあるというお話でしたが。

【阿部】　仮設住宅に入られた方が閉じこもってしまわないように、広場的な、みんなが寄り集まれる場所が必要だと。そこにはボランティアの人がいて、東ティモールのコーヒーや作業所で作ったお菓子などを置いています。

いろいろなことを今回勉強したのですが、そのボランティアは僕らでは駄目なんです。若い学生の方がいい。ただ座り、コーヒーを淹れ、お菓子を出します。そうしたら被災された方が、「どこから来たの?」「まあ、そんなに遠いところから。いいの?勉強しなくて」とか、いろいろ話をして、そのうちぽつぽつと、あの日、あるいはあの日以降の話をするんです。そうしたら、ボランティアの学生のほうが泣き出すんです。被災された方が泣いちゃ駄目、元気を出しなさいといってなぐさめるんです。でも、初対面の人が話を聞いて涙を流せるというのは、これはとても貴重なことだなと思いました。

【川井】　ここで稲村先生からグループディスカッションのご報告をいただき、福島からお出でいただいた岩崎先生からも、現場の報告をしていただきたいと思います。

【稲村】　「これからの生き方・社会のあり方」というテーマでディスカッションをしました。まず最初に、震災を受けてどんなことを考えているのかということを自由に話し、後半は、具体的な提案をしてみましょうということで議論していただきました。非常に重要な議論がありましたが、例えば1つは、日常の暮らし、身近なところから、それがグローバルに展開するように考えて、日常の暮らしをしていきましょう、その中に持続性を見つめていきましょうというようなことが議論になったというお話でした。

それから、高齢者が果たす役割として、次の世代に伝えていくということ。子どもを心配したり、子どものことを考えるというような話がたくさんありました。

環境保全のためのいろいろな活動が行われますが、その情報が、簡単に、あるいは常に得られるというシステムがない。何かそういうシステムが欲しいという話がありました。これは具体的に、例えば海上の森センターとか、私が関係しているモリコロパークの公園マネジメント会議とかでもできそうなことですね。まずはその2つが一緒になってできたらいいと感じました。

それから、生物も命も物も、皆大事にしなければいけない、そのためには、昔の知識を大切にしよう。昔は遊びの中にもいろいろな知識、知恵が埋め込まれていた。世代を超えて人と人のつながり、自然と人のつながりというものを伝えていく。そういったものが非常に大事だという意見がありました。

それから、生き方、考え方、価値観の問題、これもさまざまに議論されました。この地域は、愛知万博から始まって、COP10、ESDと、そういった機会に恵まれ、それが地域にとって非常に大きな財産になっている。ただし、それはやはり都市での発想で、地方の重要性をもう一回認識すべきであり、そういった大きなイベントのときには盛り上がるけれども、普段になるとちょっと盛り下がってしまう。もっと持続的にやるべきだというご意見がありました。

それに関して私も考えてみたのですが、このモリコロパークだとか海上の森は、そういうことに慣れている人たちが集まっていますので、ぜひ一緒になって環境と文化をテーマにしたミニ万博のようなことを毎年できないか、それならできるのではないかという気がしました。

【岩崎】　午前中のグループディスカッションに参加し、2つの点について考えたことを申し上げたいと思います。

1つは、稲村先生の分科会に参加したのですが、皆さんが思っていらっしゃるのは、人と人とのつながりということでした。震災の後では、何を得るためにもとにかく並びました。そのときに、全く見知らぬ人同士が、話をするんですね。今までは、知っている人同士での話が繰り返されていたわけですが、結局、コミュニティというものが自らを小さくしていたような気がします。実はそうではなくて、知らない人と話をするという機会を持つことが、何かこれから他人を理解する、非常に大事な契機になるのではないかなと思いました。

私は民俗学という学問をしているものですから、親と子、子と孫、そういった先祖と子孫のつながり、伝承文化というもの、これも、これからものを考える場合の知恵がずいぶん隠されているように思いました。

もう1つ、里山とか森とか自然とか、こういった言葉に皆さん大変敏感だなと思っていたわけですが、たぶん、こちらの里山と、私のほうの里山は違うんですね。こういった実態の違い、仕組みの違い、つながりの違いというものをきちんと把握した上で、次にそこから知恵を得るということが必要だと思います。

【川井】　マリ クリスティーヌさんも、東北でボランティア活動をしていると伺っていますので、ご紹介をお願いします。

【マリ】　地震が起きたときは福岡にいまして、たまたまそれもNPOのお話でスマトラ沖地震の話をしていました。スマトラ沖地震の中で助かった人々の島と、助からなかった人たちの島というのがあって、お年寄りが大勢いた島のほうが、人々が助かった率が高かったのです。それは長く生きられている方々は、伝達の中で津波の怖さを知っています。もう水が引いたら若者をどんどん山の上に誘導して、それで津波が来ても助かった。若い人たちしかいなかった島では、水が引いて魚が見えるわけですから、みんなバケツを持って魚を取りに行って、それで津波が来て亡くなってしまった方が大勢いました。

そういう話を講演で話している最中に携帯電話がすごく鳴りまして、東北でひどい津波が起きたということでした。「ご家族がいる方は、どうぞここから出て連絡してみてください」と言ったら10人ぐらいが立ち上がって出て行きまして、彼らは会場に戻って来ませんでした。

そして、その夕方になって仙台から電話がかかってきました。私たちは日本ハビタット協会といいまして、国連ハビタットの活動の中でのつながりなのですが、大勢のメンバーが東北にいまして、彼らは外にはかけられても、同じ地域の自分の親戚・家族と連絡が取れないのです。そういうところでのつながりを、私たちはやらせていただきました。

日ごろの生活の中で、どれだけいろいろな方とネットワークを結んでいるか、普段、申し上げている「お互い様」ということがすごく大切で、いつどこで「明日はわが身」なのかが分からないような状況の中で、何か起きたときに自分たちが人に対する思いというものをどれだけ普段生かせるかということが大変重要だなと思いましたし、そして、環境問題についても重要なことだと思いました。

30ワット生活のことでお聞きしたいのですが、最先端の技術の発展があって、やっと30ワットの生活ができるということなのでしょうか。

【高野】　白熱ランプとか蛍光灯よりも非常に効率が良い発光ダイオードという最先端技術を生かして初めて30ワット生活ができたという、これも事実です。一方で私たちが作った水車は、「らせん水車」というのですが、100年前に富山で町工場の親父が発明したものです。これをもう一回、リバイバルしようということで開発をやっているわけですが、そういう100年前の技術と最先端の技術が出会ったところで30ワット生活が成り立ったということなんですね。

【阿部】　高野さんに、風力発電についてどうお考えかお伺いしていいでしょうか。何か気に入らないんですよ、山の中にあれがあるのが。美しくないというか、作ってほしくないなと思いながら見ていますが。

【高野】　私も同感です。自然エネルギーというのは、その場所にある自然のエネルギーで、場所によって全然違うんですね。それを有効に生かすということなのですが、日本では、僕自身は風力よりもまず水力、それから太陽光発電よりもまず太陽熱利用、いわば日本に昔から

あるその技術を優先して検討するべきだと思います。

今、この辺に立っている大型の風車は、大体ヨーロッパの風車なんです。ヨーロッパは風向きがいつも一定していていいのですが、この辺は風向きが変わって、首がついていかないんですね。水車による小さな水力発電はもう100年前からやられているわけです。これをまずは優先してやっていくべきではないかなと思っています。

【川井】　すげの里には様々な自然エネルギー関連施設があると思います。それで十分に電気エネルギーをまかなえるだけのものになっているのでしょうか。

【高野】　すげの里は、公共施設で、一般の家庭とは違いますが、3.5キロワットの太陽光パネルが付いていて売買電しているのですが、公共施設として使っている電力よりも発電している電力のほうが多いという状況です。

お風呂は薪ボイラー、ウッドボイラーというもので、間伐材の丸太が放り込めるようなもの。地中熱利用も取り入れています。地面は5メートル下がると、ほとんど温度が一定ですので、夏は下のほうが涼しく、冬は下のほうが暖かく、その自然に流れる熱を室内に取り込み、夏もエアコン無しでもちろん過ごし、床に転がっているのが一番涼しいという、そういう建物になっております。

ですから、原発がなくなって、火力発電所もCO_2を出すから駄目といって、そういうものを全然使わないで、でもそれでは江戸時代に戻り、無理と皆さんおっしゃるのですが、すげの里に行ってみると、それが自然にできてしまっているわけです。意識しないで普通に暮らせてしまうんですね。

【川井】　空木さんの発言で重要と思うのは、新たな循環型社会に向けて、今自分たちにできることを具体的に実践されていることではないでしょうか。もう少し名古屋での取り組みをお話しいただけますでしょうか。

【空木】　私がやっている活動を3つご紹介したいと思います。

名古屋にいる人が、復興地で今も活動している人を支援するという、サポーターズサポートという活動を始めました。これは、現地の活動をこちらで広報して、こういう活動をしている人がいるんですよと、支援金を集めてお送りする。また、石巻の渡波（わたのは）のお母さんたちが作ったワタママグッズをこちらに持ってきて、それを売って、そのお金を向こうに送るといった形でやり取りをしています。義援金ももちろんいいんです。でも、義援金だと自分のお金が一体どこの誰に届いているのか、どうしても見えなくなり、意識が薄れていくと思うんです。でも活動支援金という形であれば、今、どういう状況で、どういうことをみんなが思っていて、そこに届くんだということが分かるので、意識を薄れさせないことにもなると思い、これをやっています。

もう1つが、フェアトレードです。世界は本当につながっている、そのことをもっと意識させてくれるのが、このフェアトレードだと思っています。

私はJICAでオフィシャルサポーターをやっていまして、去年、エチオピアとルワンダに行ってきました。エチオピアではフェアトレードのコーヒーの現場を見てきたのですが、美しい生物多様性の森の中で育ったコーヒーを見てくると、誰もが「ああ、絶対に私はここのコーヒーを飲もう」と思うのです。でも、なかなかそこまで行けない。ということで、「これは私がちゃんと見てきましたよ。ちゃんと生物が守られている、多様性のある森で作られた、人々の環境が守られたコーヒーなんですよ」ということで、フェアトレードのラベル、マークが貼ってあります。一方コーヒーのプランテーションになっているところもたくさんあり、そのコーヒーを選び続けていると、それがどんどん増えてしまうわけです。何気なく並んでいるコーヒー屋さんの風景で、私たちが手に取るものが、実は違う国の景色を変えてしまっているという現実があるんですよね。そのつながりを意識して、フェアトレードのものを意識的に選ぶ。これも必要かなと思いました。

そしてもう1つ、「コップなごや水基金」という活動を今やっています。レストランに入ると、美味しいお水が無料で出てきますよね。その水は木曽川から流れてきているんですが、木曽川の上流域を守っている方々は、過疎化でどんどん苦しくなってきていて、なかなかその保全がうまくいかなくなってきているんです。そういった状況が、ブルーのシートに書かれています。その真ん中にはサークルがあり、この現状を見て、もしよかったらここにお気持ちをお願いしますと載っています。美味しいお水をいただいた後に、心づけとしてチップのようにコインを置いていく、そのコインが木曽川の上流域の人々を支え、上流域の保全につながるという、そんなコップなごや水基金という運動を今やっています。

【川井】　先ほど阿部先生からも生産地と消費地をつなぐということで、東ティモールでのコーヒー栽培農家の支援事業についてお話がありました。

【阿部】　僕も東ティモールの、こういう人たちがこういうやり方でコーヒーを栽培していることを日本の消費者、消費地の人に伝えるということだけをしていたのですが、逆もすごく大事だと感じました。つまり、消費者であるわれわれがコーヒーをどう飲んでいるのか、そしてどのように評価しているかを東ティモールの人に伝える。そうして初めて「知産知消」になります。

実は震災で大槌町に行った後、すぐ東ティモールにコーヒーの買い出しに行きました。「みんなのコーヒーを今度震災地に運ぶよ」と言ったら、目の色が変わったような気がしました。経済格差から言ったら、とても追いつけないような先進国日本の人たちに、自分たちのコーヒーが役に立っているという意識が実はすごく彼らを力づけていることにもなる。そういったつながりも、また出てくるんだなと思いました。

【川井】　2014年には、持続可能な開発のための教育の国際会議があると伺っております。これについてコメントをいただければと思います。

【稲村】　愛知万博、それからCOP10と続いて、さらにESD、持続的発展のための教育、つまり子どもたち、次の世代のために、環境について考えていこう、できることをしようということになると思うのです。

私は先ほど、世代間の交流、岩崎先生からも伝統文化がとても大事、それが地域にとって財産であるという話がありましたが、それが今、なかなか伝わらない。それを子どもたちに伝えるためには、楽しくなければいけないんですよね。子どもたちがうきうきするようなことでないと伝わらない。大人がお説教したって聞いてくれないわけですよね。子どもたちが遊びながら感性で受け入れる、そういうようなものを作れたらいいなと思っています。

地域でやれたらいいなと思うことをもう1つ、これは、海上の森、あるいはモリコロパークを拠点としたグリーンベルト。森、自然を都市部に向かってつなげていくということです。すぐにできることではないかもしれませんが、実は東郷町でその構想を今始めていますし、愛知県も生態系ネットワーク・モデル事業というものを始めています。われわれ市民がそれを盛り上げていけば、何かもう少し早く、規模も大きくできるのではないか。緑を広げていくだけではなくて、そこに文化的な要素、人の要素を加えていって、そのところどころでお祭り広場みたいなものができたり、あるいはこれが災害のときの避難路になったりするような、こういう大きな発想を持って、何か動いていくことができれば、本当にいいなと思っています。

【川井】　今回は、3月に起こった東日本大震災、福島第一原発事故、こういったものを機に、私たちの生活や、社会のあり方を基本的なところから問い直していこうということで議論いただきました。この議論を後ほどフォーラム宣言という形でまとめさせていただきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。